

Kay's T-shirts Book

Tシャツが
描く
旅の記録

Kay Cervato





■ Tシャツは、旅の基本アイテム

暑い気候の場所はもちろん、寒い地域でも、コックトンのTシャツは、旅の荷物に欠かすことのできない強い味方です。しかもハードな着回しや旅の途中のバスタブ足踏み洗濯に耐えてしっかりと活躍してくれる一方、時にはドレスアップにも対応して着こなせる、心強いアイテムです。

■ Tシャツのつくりは、シンプルでさまざま

まるで絵を描く白いキャンバスのように、描かれるデザインによってさまざまな表情をみせてくれます。文字、図柄などのそれらは、有名観光地の地名そのものもあれば、色、イメージ、ゲージユツ的デザインまでいろいろな個性をだしてくれれます。

■ Tシャツは旅のたからもの

旅で見つけたTシャツたち、いわばご当地Tシャツのコレクション。

その1枚1枚は、訪れた場所の素敵な風景、楽しい思い出、はたまた忘れられないエピソードやハプニングを思い出させる、大切な旅のたからものでもあります。



Juan les Pins, France

フランス ジュアンレパン

街のざわめきがきこえる

■ これは、友人からのプレゼントです。「ただのTシャツだけど、お土産」のメッセージどおり、地名が大きく描かれたものでした。彼女の心遣いは嬉しかったけれど、とりたてて印象深いデザインのTシャツではありませんでした。

■ その後、彼女が住むその地を訪ねるチャンスができました。ジュアンレパンは、フランスの有名リゾート地コートダジュールにあります。中心地のニースから車で20分ほどの場所で、世界的映画祭で有名なカンヌにも近いのですが、リゾート客などでざわざわしていない落ち着いた海沿いの街です。

■ ホテル前の並木は、ちょうど黄葉の季節。ゆるやかな坂道を下っていくとまもなく海が見えてきて、一面の芝生になっている公園に突きあたります。ここにはメリーゴーランドがあって、秋の日射しのなか子どもたちが楽しそうに遊んでいました。そろそろ街灯がともり始める夕暮れどきで、ゆるやかな時間が流れ、まるで一幅の絵のような風景でした。

■ 旅から戻りしばらくたったころ、ふと筆筒にしまっているTシャツが目にとまりました。地名と太陽のイラストが描かれているだけに、楽しかった旅の風景が浮かびあがり、出会ったひとびとの笑い声や、街のざわめきが聞こえてきました。

■ 以前友人からもらったときには何のヘンテツもなかったのに……いつのまにか引出しの中で、素敵なTシャツに変わっていました。



北緯43度、東経7度。地中海沿いのビーチにはレストランが並び、10月～12月は牡蠣シーズン。フランス語のメニューは、料理や素材名として見たり聞いたりしているから意外と想像がつくもの。「スプデボワソン」(さかなのスープ)など見つけるのも楽しい。





北緯13度、東経103度。世界中から観光客がピンポイントで訪れる。伝統的クメール料理としてアモック(サカナのココナツミルク蒸し)が有名だが、ほかにも卵が美味しいと評判。その理由はニワトリが放し飼いで元気だから!という一説あり。

アルティザンの昔と今

かつての内戦の傷跡は消えつつも、地雷などにより手足を失った人も多いことから、国では絹織物や石工などの育成に力を入れています。手先が器用なアルティザン(フランス語で職人の意)が作るオーガニックコットンの上質なTシャツもその一つ。でも、一度洗濯したら、小さく縮んでしまいました。

幸い、滞在中は小康状態でしたが、それまでの大量の雨でメコン川やトンレサップ湖あたりの低地は一面泥水。どこまでが本来の陸地か見分けがつかなくなっていました。それでも、町のひとびとは家財道具を上へのほうに引き上げたり、水上生活に切り替えたり、洪水にあわせた生活をしているようでした。観光客が、うっかり川に足を踏み入れてしまうのでは? 思いがけずワニやサカナと遭遇してしまうのでは? とおっかなびっくり不安げに歩いているのとは対照的な光景でした。

ここはクメール王朝の栄華を残すアンコールワット遺跡群の町です。夥しい数の石彫遺跡には「ゾウのテラス」という王様がお出ましになる際に使われたゾウ乗り場もあり、石段はゾウの背中と同じ高さに作られました。私が訪れたのは10月初旬。町は近年の都市化・人口増加に排水の整備が追いつかず、大洪水が発生していました。インターネットのニュース画像で見ると膝の深さほどもある赤茶色の泥水に一喜一憂しつつ、実際に訪ねることができるとは、どんな靴を持っていくべきか……など旅の前から想いを巡らせました。

SIEM REAP, CAMBODIA

カンボジア
シエムリアップ





Grand Canyon, United States of America

アメリカ グランド・キャニオン



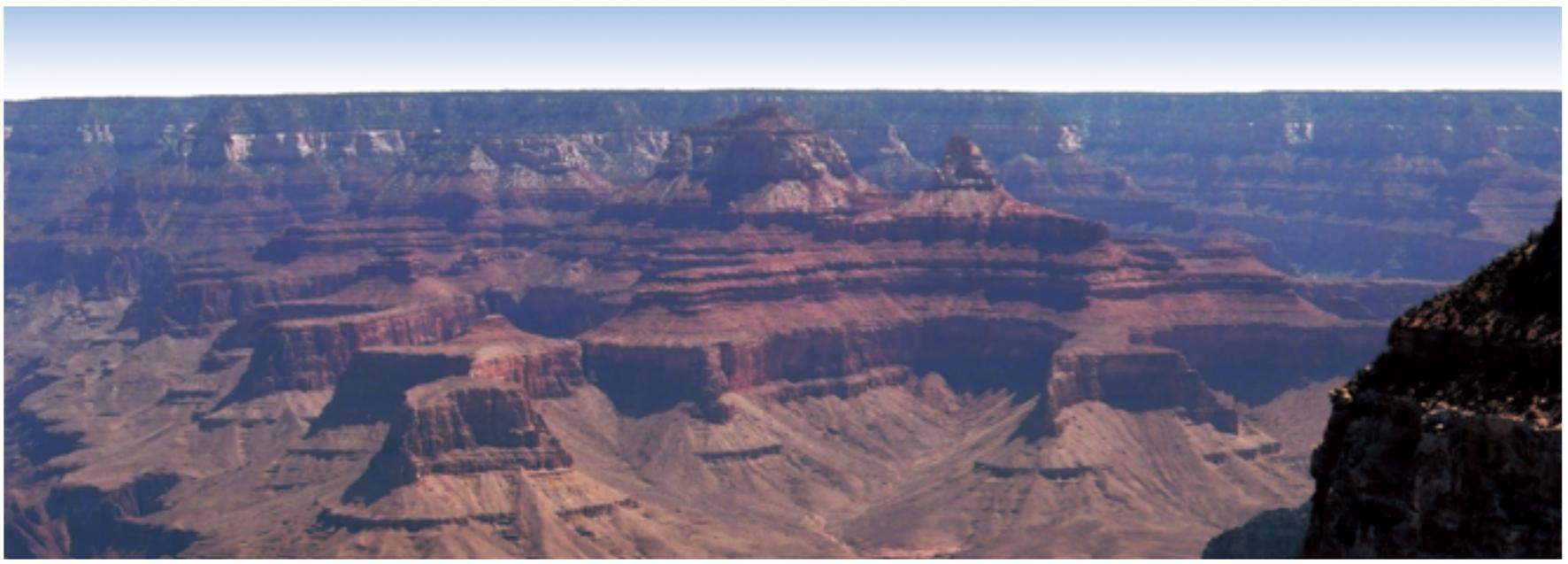
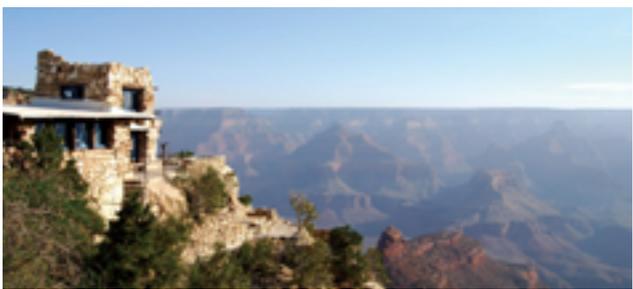
ダイナミックな自然のリズム

■ 大地と水が長い時間をかけてつくった雄大なグランドキャニオンは、現在でも少しずつ谷が深くなっていく進行形の地形です。ラスベガス発の飛行機から見える景色は、ほぼ2時間半ひたすら赤い土と灌木が続き、ほとんど変化はありません。天候良好にもかかわらず機体が小刻みに揺れ続けるため、ずっと身体に力を入れ支え続けていなくてはならず、結構ハードなフライトでした。気流の変化が激しいのでしょうか。

■ グランドキャニオンでは、暑くても汗はあまりかかずさらっとして爽快です。けれど、最小湿度は僅か2%まで下がり、大きく笑うと鼻の奥の血管がピリ！と音をたてて出血してしまったこともあります。

■ そんなカラカラな厳しい気候なのに、野生のリスに会いました。何を食べ生息しているのか、くるくると動き回っていました。昼間は賑やかな観光地とはいえ、長さ446km、崖のてっぺんから谷底のコロラド川まで平均1200mの広大な荒地です。夜になると崖や谷では夜行性の動物達が活動し、コヨーテの遠吠えも聞こえ、大自然に生きる彼らの別世界があるのでしょうか。

■ 最近になって、ネイティブ・アメリカンの言い伝えによる地球再生の物語『虹の戦士』を読みました。一人の少年が、自然の中で鍛錬をしスピリットを育て、大きなビジョンを抱く戦士となる……以前買い求めたこのTシャツが、時を超えて踊り始めたようでした。



北緯36度、西経115度。グランドキャニオンやカジノで有名なラスベガスが、砂漠近辺に位置していることは忘れがち。乾燥しているためポテトチップスはシケなくてよいが、人間のお肌も水分を失ってカサカサ。日本ではしっとり＆モチモチ腕の赤ちゃんも、しわしわ&ザラザラ。





金色にかがやいて

ルアンプラバンは、ラオス北部の古都です。飛行機が着陸態勢にはいると、窓からは、赤土が溶け込んだ川がうねって流れているのが見えてきます。この町はカーン川がメコン川に流れ込む合流地点にあり、市街地全体が世界文化遺産になっています。

■ この朝は、ニワトリのけたたましいコケッコと、静かに進むオレンジ色の袈裟を着た僧侶達の托鉢の列が始まります。その後じりじりと強い日差しが照りつける昼間になると、通りは人通りが消え、寺院を巡る観光客も、あまりの暑さに冷たい飲み物を求めカフェに逃げ込むほど。町全体がじつとりとした暑さと静寂に包まれていました。

■ 日が傾いてくると、メインストリートではナイトバザールの準備が始まります。露店に商品を並べたり、照明の準備をしたり。それを横目に見ながら、プーシーの丘をめざして328段の階段を昇ります。頂上からは町や2本の川が一望でき、とりわけ日没の景色が美しいと評判なのです。長い階段を昇った達成感と心地よい風に身をまかせて日没を待っている、2つの川面が夕陽を反射して金色に輝き始めます。刻一刻とその輝きが変化していくさまは息を呑むほど美しく、まさに天空からの眺め。

■ 夢見心地で町に降りてくると、ナイトバザールの真つ最中でした。露店の裸電球の光がゆらゆらと陰影を作り、遠くから音楽が聞こえて、ここもまた夢の中のようにでした。

Luang Prabang, Laos

ラオス ルアンプラバン

北緯19度、東経102度。山あいの古都で80以上の寺院が集まる祈りのまち。旧フランス領のため、クロワッサンが美味。隣国タイのチェンマイからの国際線はプロペラ機で、空港では偶然貴賓客の到着と重なり、赤絨毯と民族衣装の美女達による出迎えを受けた。





phi phi islands, thailand

タイ ピピ諸島

いつでも海とともに

■ アジアのビーチリゾートとして有名なプーケット島から更に船で約4時間のところに、ピピ諸島の有人島ピピドン島があります。シーカヤックに乗りパドルで漕ぎ出せば、遠浅でどこまでも透き通る紺碧の海と色あざやかで種類豊富なサカナたち。さらには断崖絶壁の奇観もあり、「007」などの映画に何度も登場したこともある、まさにこの世の楽園です。

■ ビーチリゾートとはいえ、数件のホテルのほかにはシンプルなバンガローやゲストハウスがあるのみ。この島を訪れる人びとの関心は、ゴージャスなホテルライフより、広く魅惑的な海の中にあるのです。

■ 夕暮れになると、島のダイビングショップの前には、釣り上げられたサカナや魚拓が次々と飾られます。中には体長1m以上の立派なカジキマグロも！夜には海から上がったダイバー達がバーやレストランに集まり、こんなに多くの人々が日中海の中にいたのかと驚くほど。その日の釣りの成果やダイビングの話で夜更けまで盛り上がります。

■ そんな島が大津波に襲われたのは、2004年のスマトラ沖大地震。日本の四国の形に似た島の中心部は、陸地の幅が狭いうえに海抜も低いことから、双方向から押し寄せた津波の先端が、なんと上空でぶつかりあい砕け散ったそうです。

■ 常に海とともにある島。いつかまた訪れる日があるかと、想いを馳せます。

北緯7度、東経98度。小さな島の生活物資は、ほとんどが船で運ばれやってくる限定品。島で生産される農産物や工業品はみかけない。毎朝のホテルの食事も例外ではなく、ヨーグルトは争奪戦。みんなが狙っていてちょっと目を離したスキになくなってしまふ。



番外編その1

手の届かないTシャツ

■ タイのチェンマイ北部にあるメーピンエレファントキャンプ(Mae Ping Elephant Camp)を訪れたことがあります。ゾウは、昔から切り出した木材を運んだり、バンコクなどの都市に向けて建設資材や荷物を運ぶタイの重要な輸送手段の一つでした。10頭以上のゾウ



■ たちが、それぞれ直前を歩くゾウのしっぽを鼻でつかみ、まるで「ゾウ電車」状態でゆっくり進む様子は、圧倒的迫力で見応えがあります。しっかりと働いているのですね。

■ 以前、キャンプはこのような働くゾウの訓練施設でしたが、今ではトラックなどの手段が発達したり木材の需要が減少したため、観光客相手のショーや、ゾウの背中に乗ってトレッキングを楽しむ場所になりました。

■ ゾウつかいは、コーという1本の棒一つで大きなゾウを巧みに操ります。このゾウつかいが着ているTシャツが、とっても誇らしくカッコ良かった！他所にはないので、ご当地Tシャツコレクターとしては、ぜひともコレクションに加えたい1枚でした。キャンプのお土産売り場では販売されていなかったのですが、「ゾウつかいのみなさんが着ているあのTシャツを買いたいのですが？」と勇気をだして聞いてみたところ、実に意外そうに「売ってない」という回答でした。このTシャツは楽しむためのものではなく、仕事をしっかりとこなすプロの仕事着なのです。

■ 手に入れられなかったのは大変残念だったけれど、新たなTシャツの魅力に深く納得したのでした。

番外編その2

はじけて、パツ！

■ ご当地Tシャツではありませんが、これはじけかた！がたまらない。番外編として堂々エントリーです。

■ 図柄のデザインは、それを着ている本人が思っている以上に、向かい合う相手にインパクトを与え、アピールするもの。つついTシャツに目がいつちやいます。

■ ここで紹介するのは、ガッツポーズのタイガーマスク、冷蔵庫に向かって行進するペンギンたちなど。こんなTシャツを目の前にしたら、たとえ深刻な会話をしていても、展開が変わるかもしれません。





■
旅に出て、初めての場所を訪れると、Tシャツを探して買い求めるようになりました。デザインを選ぶポイントは、場所や地名がわかること、できればその旅で受けたインパクトが描かれているもの、そして、サイズは大きめ。とはいっても、Tシャツを買うチャンスは、移動途中で通りすがりのお土産屋さんがほとんどなので、パパッと選ばねばならない短時間勝負です。

■
購入したTシャツは、大切に仕舞っておくのではなく、毎年夏になるとどんどん着ています。たびたび洗濯するので、洗いざらしでヨレたり、汚れてシミがつき悲しくもありますが、旅の記憶を呼び覚ます鍵となり、ますます愛着が湧いてくるものです。

この本で紹介したTシャツのうち、最も古いものは2000年に訪れたピピ島のTシャツ。ヨレてもなんとか撮影に耐えられたのが良かったかな。

Kay

Kay's T-Shirts Book

Tシャツが描く旅の記録

2013年11月30日発行

著者 Kay Cervato
編集・デザイン こしらえ文庫蔵